

平山復二郎氏が1月19日御逝去になられ、多くの想いが学会へ寄せられましたので、ここに一括して掲載させて頂き、亡き氏をお慰びいたしたいと存じます。なお文章はすべて原文のまま掲載したことをお断わりいたします。  
【編集部】

## 平山復二郎君の死を悼む

平井喜久松

土木学会前会長 平山復二郎君は、去る1月19日忽然として逝去された。誠に惜しい人を失ったと思う。

特に最近、科学技術の振興が、強く叫ばれている時でもあり、それには打ってつけの君の手腕力量に待つ所甚大なるものがあり、又大に期待されて居たことを思うと、尚更惜しまれてならない。

君が今迄我が土木界、又広く我が科学技術の上に寄与された功績は、誠に大きい、それらについては、又精しく述べて下さる人があると思うので、私はここに1月24日、君の柩の前で、友人総代として、涙とともに読んだ弔詞を掲げて、追悼の言葉としたい。

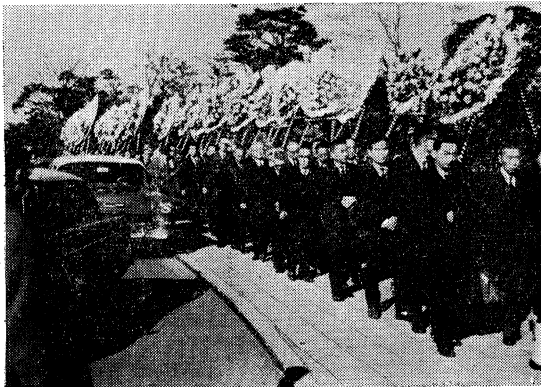
### 弔 詞

平山復二郎君

君の積極的な、あの元気な姿、又あの張りのある、力強い声に、接することが、出来なくなったと云うことは、我々友人にとって、誠に淋しい。

昨年の秋以来、君の病気の重大であることは知らされていたが、病床でも尚元気な声で話しているのを見て、尚希望を繋いでいたのであったが、それも空しく、1月19日の霜厚い朝、君の死を伝えられたことは、我々にとって誠に哀しいショックであった。

1月24日青山斎場における一般告別式風景



君は大学を出ると直ぐに、現在の国有鉄道の前身である鉄道院に奉職し、主として鉄道建設方面に勤務し、工事の進捗を画期的に推進した機械化の導入とか、コンクリートの合理的混合法の採用とか、又世紀の難工事とされた丹那トンネルの掘進に、種々の工法を適用、遂に見事にトンネルを貫通させた事など、幾多の功績を残されたが、何よりも大きな功績は、君の周囲に数多くの立派な技術者を輩出された事と思う。

その後、君は鉄道省から転じて満鉄に移り、満洲の開発に腕を振っていたが、不幸敗戦の憂目を外地で迎え、具にその艱難を味うて故国に帰り、その後は、数多くの会社、学会、協会、政府機関、などに關係して、科学技術の向上、後進の誘導などに、力を尽していられたが、幸いにして私は、学窓から君と専門を同うし、国鉄、外地、故国と、いつも同じ仕事に従事したので、仕事の上でも、又私の交りの上でも、長い長い間の付合であり、君に対する懐しい思い出は、誠に尽きないものがある。

君は物事を、素直に真直ぐに考え且実行する人であった。そして君は随分剛情でもあり又強引でもあった。しかし、君の剛情も強引も、皆君の純情と誠意から生れたものであったから、誰れも君を恨んだり又不快の念を抱くものはなかった。

君は又非常に忙しい人であった。仕事の上では職務に忠実でこれに没頭するので忙しく、又何事もトコトまで割り切らないと承知出来ない質なので、自然忙しくならざるを得なかったと思う。殊に近年は、学会であるとか、協会であるとか、技術士会であるとか、鉄道建設審議会であるとか、都市交通委員会であるとか、其他何々委員会と数多くの会議会合に關係していたので、その身辺は誠に目まぐるしい忙しきで、しかもそれ等の会議会合は、君の裁量、推進力に待つものが多かったので、君の心労は一通りのものではなかったと思うし、自然君の健康を害したのではないかと悔まれる。

しかも君は、この様に忙しい傍ら常に読書を怠らず、専門の土木工学に関することは勿論、技術一般、政治、社会、思想の事から、文学、哲学方面に迄亘って、実に広い範囲に及んで読破していたことは、誠に敬服の至りであり、驚嘆の外はない。この広汎な読書の賜は、一方君の流暢な麗筆と相俟って、数多くの著書の刊行となり、他方君の創造力を豊かにし、常に新しいアイディアを生み、又他の人々の意見を理解する偉大なる抱擁力を身につける素となったものと思う。そして一度決意した考えは、何のこだわりもなく直ちに実行に移し、敢然と突進する原動力となったものと思う。

君は元来運動好きで、戸外で過した時間も、生涯の内

随分長い時間を占めた事と思う。学生時代は野球に、社会人としてはゴルフに熱中したが、典型的なスポーツマンであり、フェアプレーの精神を身につけていた。この精神は、単に運動の上のみに止まらず、君の性格となつて、日々の行動の上に、光を放っていた。

君と交りを深くした友人は、その範囲が各方面に亘り、広く且層の厚いものであった。しかもそれ等の数多くの友人が、一様に君を敬愛し、敬慕し、信頼した所以のものは、君が何物にも屈しない純情と、巧まざる誠意とを、常に君の心の奥底に保っていたからに外ならない。ここに集まった先輩、知己、同僚、後輩、皆君を知っている人々である。互いに心と心とが触れ合った親しい友達である。我々は君を失うて誠に淋しい、誠に淋しい、と云う感を、しみじみと味わされたのである。

しかしあの豊かな人なつこい笑を含んだ君の顔と、その心は、いつ迄も、いつ迄も、懐しい思い出の宝庫として、我々の心の中に生きて行き、我々を励まして呉れるであろう。

では、左様なら平山君、どうぞ安らかに

友人総代 平井喜久松

(筆者：名誉員 工博 極東鋼弦コンクリート振興KK会長)

## 平山復二郎君を想う

### 内海清温

昨年9月のある日、平山君からいつものとおり電話で“こんどの土曜日はどうだ”と云って来た。ゴルフに行こうということだ。あいにくその日は差し支えるのでそのつぎの土曜日を約した。それなのに、その最初の土曜日に突然入院してしまった。驚いて病院にかけつけて見ると、ちょうど輸血の終わったところであった。どうしたのかと聞くと、このごろゴルフをやったあとで疲れるので医者に相談すると、貧血がひどいようだからその原因を調べるために入院をすすめられたのだ。輸血すると、三日はたいそう具合がいいからこれを続けるのだと常に変わず楽観的であった。それが意外にも癌であつて、あの元気だった平山君が4カ月の闘病もむなしく、ついに逝ってしまった。

平山君をはじめて知ったのは一高時代である。私が入学した時彼は3年生で野球の主将で名3塁手のきこえ高かった。彼の地を這うような格好で塁を守ってる姿が今でもありありと目に浮ぶが、それよりも深く私に印象づけたのは、まれに見る秀才としての平山君であつた。当時は毎学期末、学期試験の成績が成績順に、本館の玄関脇に張り出されたが、平山君はいつもトップグループ

にいた。のんびりした田舎中学を出て入学して見ると、高等学校の二部甲類(工科)というものは目まぐるしく忙しい。毎日のように数学の宿題が出る、これをやって往かなければ次の時間の講義がわからなくなるから否応なしだ。物理、力学なども講義の聞きっぱなしというわけにゆかない。更に製図というものがあって毎学年何枚かかかされるのに非常に多くの時間を要した。とても一部(法文科)の諸君のように呑気に遊ぶ暇などなかった。従つて落第もずいぶん多かった。そんな中であつて平山君は1年から卒業するまで、毎日放課後野球の猛練習をするから夜は相当疲れてるであろうし、勉強する暇がない筈なのにいつも成績は抜群であつた。この男は一体どんな頭をしているんだらうと舌を巻いた訳だ。

平山君と交際の始まったのはいつ頃からであつたかはっきりしないが、ごく親しくするようになったのは彼が建設局長として東京に落ちつくようになってからで、土木学会などでもよく会い、また故山口昇君を中心としてその前後の東大卒業生若干名がおりおり会合して時局を論じたり、とくに大学のありかたなどを語り合つた。そのうち平山君の従妹が私の義弟と結婚したりして、公私に会う機会が多くなり、いつとはなしに相許すなかつた。

そのうち平山君が満洲に行くことになつた時“君が内地を去ることは僕個人としても心淋しいが、それよりもわが土木界にとって大きな損失だ。満鉄を一期勤めたらサッサと帰つて来て欲しい”といったことをハッキリ覚えてる。ところが満鉄をやめたと思つと満洲電気化学ついで満洲電業の理事長となり終戦まで帰つて来なかつた。終戦になると満洲在留邦人の会長におされ、その人たちの生活の世話から引揚げの世話まで全部果して、最後にシラミから伝染するといふ発疹チブスを背負いこんでようやく帰つて来た。当時の在留邦人に親のように慕われ感謝されている。

戦後平山君と最初に初めたのが、国土開発協会であつた。これは土木学会はどこまでもアカデミックな学会た

ありし日の平山氏(左端)右へ黒田、平井、山本の各氏  
(1961年8月18日、大洗ゴルフ場にて)

